

“感じる”⇔“表す”学びの連鎖

～美術館における鑑賞学習を通して～

西井 恵美子

学習指導要領の改善の基本方針に学習内容「鑑賞」の指導の充実が求められていることや、また、美術館や博物館等と連携した学びが公に推進されている背景もあり、鑑賞学習の研究は今句であると感じる。高学年ではいろいろな美術館、学校において鑑賞学習の実践が増えてきている。しかし、美術館での鑑賞学習の低学年における実践は多くない。徒歩数分という隣接した場所に美術館がある本校だからこそ、特色を活かした学習ができるのではないかと考えた。実践、研究を通して、低学年における鑑賞学習のあり方を探っていく中で、本物の美術作品に早い時期から触れることの重要性も感じられた。美術作品との距離を縮め、美術作品から受け取る感じ、得られる気づきや思いなどを、小さい年齢から経験として積み重ねることが、その子の感性を磨き、表現の力を育てることにつながると考えている。

キーワード：感性、鑑賞学習、美術館、低学年、言語活動

1. “感じる”⇔“表す”学びの連鎖

子どもたちは想像力を働かせ、美しい形や色の感じ、その組み合わせに気付き、思いに合った表し方を見つながら造形活動に取り組んでいる。図画工作科の学習はつくりだすことそのものが目的であり、作品はその結果として表れるものといえる。造形活動において出来上がったもの（作品）より、そこに至るまでの「こと（過程）」が一層重要なのである。

子どもの造形活動は連続した一連の行為であるといえる。子どもは感性を働かせて対象と向き合って“感じ”、その“感じた”ものを“表そう”とし、また、“表した”ものから“感じ”、そこから思いうかんだものをつけたしたりつくりかえたりしてまた“表し”…というように学びを連鎖させながら、つくりだす喜びを味わう。それは自分の力で学び取った喜びである。

子どもの表現は、イメージを探ることそのものであったり、行為によってイメージをかたちづくっていくものであったり、確かなイメージによって行為として表されているものであったりする。そして、考えて表現したことや、偶然のようにここで思いついてやったこと、また、ああでもないこうでもないで試行錯誤の上を選んで行ったことすべてが折り重なり、目に見える色や形をつくりだす。そして、つくっているうちに新しいイメージが生まれ、次の行為につながっていく。これらは「つくる」という言葉から連想するような一方通行の働きではなく、かたちづくりながらコミュニケーションをしているような、絶え間なく対話をしつづけている活動である。子どもの表現方法は、イメージをもとにつくるというより、今ここで思いつき、表しながら感じ、また考え、新しい思いつきによって次々とつくりかえていくものである。よって、感じることと表すことには行きつ戻りつの関係（⇔）がある。子

どもたちはその活動のなかで色や形、バランスを直感的に構成していきながら、自分らしい表現をつくりだしていくのである。

2. 美術館における鑑賞学習を通して

本校は、自然に恵まれるだけでなく、公共施設や文化施設などが近隣にたくさんある。和歌山県立近代美術館はそのうちのひとつで、いつもステキなコレクションが展示されている魅力ある場所である。しかしこれまで、徒歩圏内という近さに本物の美術作品がありながら、なかなか学習の機会に有効に活用できていない。そこで、今回美術館での鑑賞を通して学習し、そこから得た学びを広げることができるような題材を展開したいと考えた。美術館のしっとりとした空気に心地よさを感じ、多くの美術作品に触れる中で、本物を見る楽しさを味わい、そこから感じたものや学んだものを活かして自分なりに表す面白さを感じさせたいと考える。

また、学習指導要領（図画工作科）の改善の基本方針にも、学習内容「鑑賞」の指導の充実が求められている背景や、美術館や博物館等と連携した学びが公に推進されている背景もあり、鑑賞を取り入れたこの学習は、旬の学習、題材であると感じる。そしてまた、今回鑑賞したコレクションは『自宅から美術館へ 田中恒子コレクション展』（以下田中恒子コレクション展）というもので、一人のアーティストを特集する形のものでもなければ、ある美術館の所蔵作品を展示するものでもない、一人のコレクターが私的に所蔵するお気に入りの作品たちを展示するものである。自分の好きなものを集めることを楽しむ感覚は、子どもの中に芽生える思いであり、学級の子どもたちの中にも自分の好きなものを「あつめる」ことを楽しむ子どもが

いる。そのような点からも、生活の中に心地よいものをという思いで様々な作品を集めて、自らのコレクションとして表現しているコレクターの気持ちに、1年生なりに迫れるのではないかと考えた。

2. 1. 感受と言語のかかわりの追求

新学習指導要領において「言語活動の充実」が重要なポイントとして挙げられているが、造形的な表現を軸とする図画工作科においても、言葉は避けて通れないツールである。例えば、対象に出合って無意識に出るつぶやき、対象から受ける感じや生まれる思い（自己内言語）、自分の思いやイメージを表そうとして浮かんでくる言葉、また、他者へ伝えるための言葉、互いに伝え合うことから認識を更新し、そこからまた思い浮かぶ言葉…などいろいろなものがある。それらは感じること（感受）と言葉に表すこと（言語）を行き来しながら連鎖・連動しているといえるだろう。[図1]

美術館での学び、本物に触れる、美しいものに出合う鑑賞の学習を通して、感じること（感受）と言葉に表すこと（言語）のかかわりに焦点を当て、子どもた

ちの姿を追っていきたいと考えた。

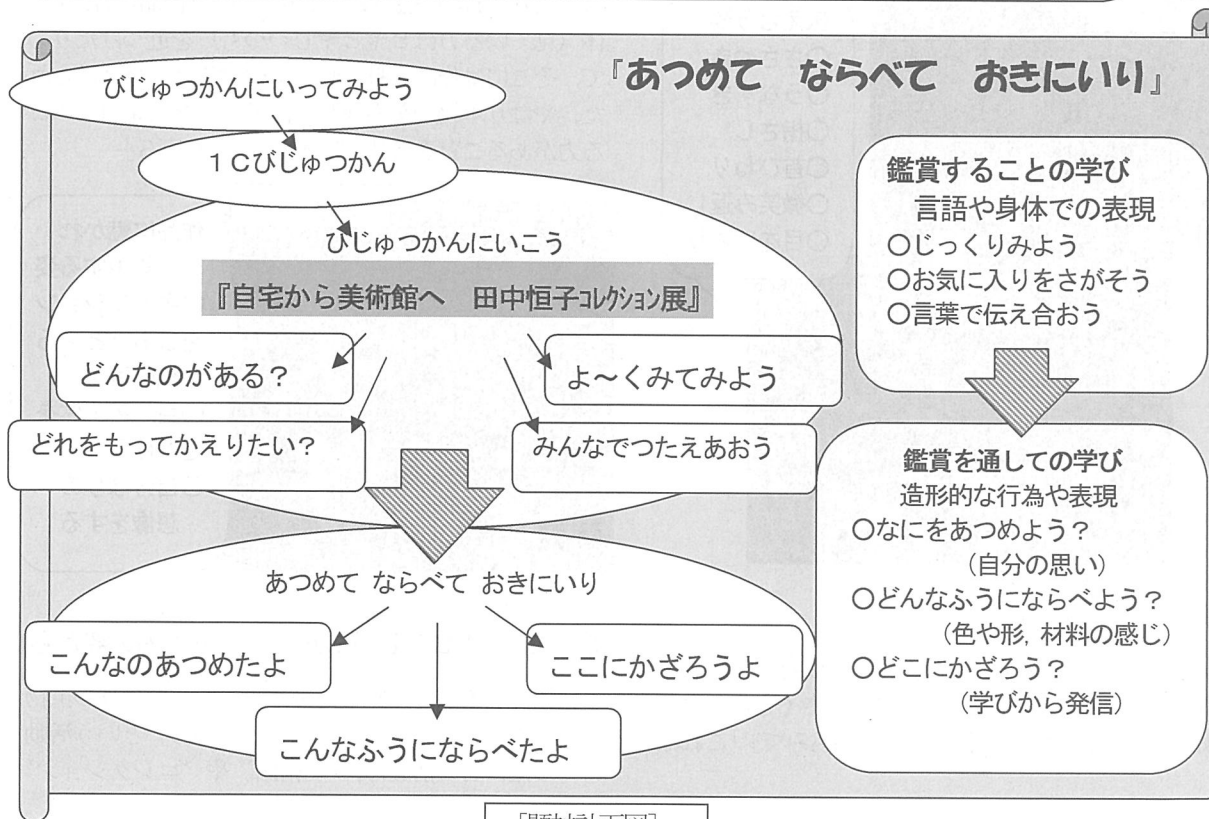
2. 2. 鑑賞と表現をつなぐ学習

鑑賞して学ぶことはそれだけで意味のあることであるが、それだけにとどまらず、そこから得たものを通じて自分の表現をつくりだすところへとつなげていきたいと考えた。そこで、美術館で感じたものや学んだことを活かして、ならべたり、あつめたりといった造形行為につなげる題材計画とし、学習を立体的に構成した。[題材計画図]

2. 3. 鑑賞教育のカリキュラムづくり

本物の美術作品に触れることの意義は周知の通りであるが、各学校はその機会を作りたくとも物理的な問題（美術館との距離や交通手段等）のために実現しにくいという声が多く聞かれる。しかし、本校は、徒歩で気軽に美術館へ行くことができるという好環境である。そのよさを活かし学習に取り入れることができれば、図画工作科における鑑賞教育のカリキュラムをつくることにも発展できる可能性が出てくる。カリキュ

[図1]



[題材計画図]

ラムを作っていくとすれば1年生はそのスタートの学年であるので、その出会いは重要な意味を持つ。基本的な美術館でのルールを知ることから始め、鑑賞の学習スタイルを探っていきたいと考えた。

3. 授業の実際

題材『あつめて ならべて おきにいり』
～びじゅつかんにいこう～

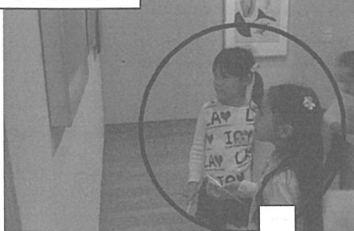
3. 1. 美術館との出会い、子どもの姿から

初めての鑑賞学習として美術館を訪れた。子どもたちの中にはすでに幼稚園の時にも来たことがあると答えた子は3、4名ほどであったので、事前に美術館でのルールや美術館で学習することなどを学習した。子どもたちは、美術館の独特な雰囲気にわくわくしながら常設展を観て回った。以下に子どもの姿を通して授業の実際を振り返っていく。

【子どもの姿 ～その1～】 伝え合う姿

子どもたちは、それぞれ個々に自分の興味あるものを観ていくのだが、自然と「みてみて」「なにになに？」といったささやきや、見つけたものや感じたものを一緒に共有しようとする動きが生まれる。下の写真は、1人の子どもが小さな声で友達に呼びかけて2人で観るようになり、作品を指差して伝えたり、ささやいたり、微笑んで返したりする2人の姿が周りにいた友達にも伝わり、いつの間にか4、5人のグループになって鑑賞している姿である。このように自然な流れの中で、個の気づきが広がっていく。[写真1]

[写真1]



伝え合う姿

- ささやき
- うなずき
- 指さし
- 首ひねり
- 微笑み返し
- 目をぱちり



【子どもの姿 ～その2～】

気づきを共有する姿、
作品や自己と対話する姿

子どもたちは作品の前で、小さなささやき声で会話を始める。「ここにもあるで」「あっちもみて」「これな

んやろなあ」「すごいなあ」…などと言いながら気づきを共有していく。そうして何人かで話すうちに「あつ、そっか」「ほんまや」といった言葉も聞こえてきた。子どもたちが互いに気づいたことを言い合ううちに、また新しいことに気づいていく姿であるといえる。

また、感じたことをかいて表現しようとして、「かく」目的から言葉が生まれる。思いや内言語が文字という言葉として外に表れる瞬間である。そうして「かこう」として作品を「観る」往復活動が繰り返され、作品や自己との対話が連なっていくのである。[写真2]

気づきを共有する姿 互いに伝え合い、新しい気づきに出会う

[写真2]



作品や自己と対話する姿「かこう」として、 作品を「観る」往復活動が自然と起こる

【子どもの姿 ～その3～】

作品に魅かれ、集中する姿

常設展の多くの作品の中で、子どもたちの人気を集めたものは大きな絵画とシンプルな立体作品であった。子どもたちはそれらの作品の前で、夢中になって図工カードに気づきや思いを書いていた。読めない文字で表記された作品名を読もうとしたり漢字を真似して書いたり、作品を絵に表したり、じっと作品に目、手、体（見ている方はヒヤヒヤしつつも）を近づけたりして、そこには作品に魅かれて集中する姿が見受けられた。やはり本物の美術作品には子どもたちを引きつける力があることを改めて実感した。[写真3]

[写真3]



作品に魅かれ 集中する姿

- キャプション
を読もうとする
- 絵に表す
- 目・手・体を
近づける
- 自分なりの
想像をする

3. 2. 「1Cびじゅつかん」と子どもの姿から

初めて美術館で鑑賞した後、子どもたち自身の宝物を持ち寄り、教室で「1Cびじゅつかん」という活動を行った。この活動は、「美術館」や「コレクション」

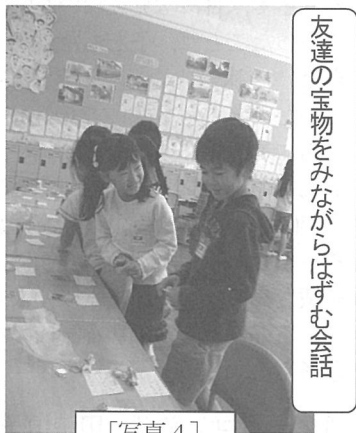
というものを1年生の子どもたちなりに身近にとらえられるようにしたいと考えて取り組んだものである。子どもたちにとっては美術館にある本物の美術作品と同じくらい自分の宝物が大切であることが、「1Cびじゅつかん」で互いに鑑賞しあう姿から読み取れた。そして互いに鑑賞しあう活動を通していく中で、子どもたちの宝物がたくさん集まった「1Cびじゅつかん」が、美術館で鑑賞する「田中恒子コレクション展」と同じような意味を持ち、自分たちで集めたりならべたりしていく造形活動の楽しさにつながっていった。次に挙げるのは、活動中での子どもたちの姿である。

【子どもの姿 ～その4～】

友達の宝物を通して会話が生まれる

友達の宝物を通して生まれる子ども同士の会話に2つのタイプが見られた。

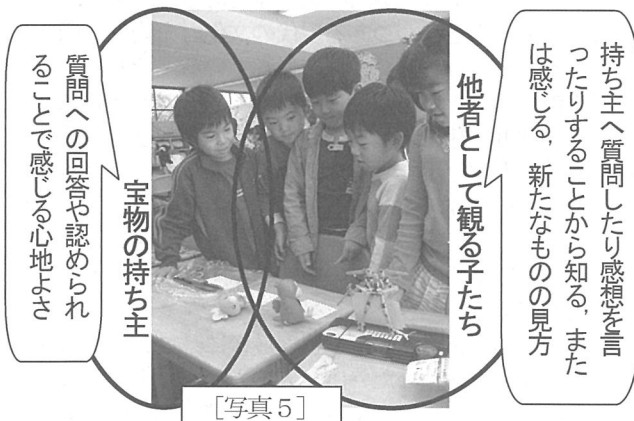
1つは、宝物を他者同士で観合っ、そこから話はずむもの。そこには観ている者同士で感じた思いが展開される。[写真4]



[写真4]

友達の宝物をみながらはずむ会話

もう1つは、宝物の持ち主の子どもを交えて、会話が進むもの。その中には、他者が観た思いと持ち主の思いの交流が生まれ、質問や回答も飛び交う。そこで他者から認められたりうらやましがられたりすると、持ち主は心地よさや満足感を味わい、他者はそこからまたそのものに対する見方を変えたり新たな感想を持つ。[写真5]



[写真5]

質問への回答や認められることで感じる心地よさ

宝物の持ち主

他者として観る子たち

持ち主へ質問したり感想を言ったりすることから知る、または感じる、新たなものの見方

この活動後の子どもたちの感想から、友達の宝物を観て、そのよさを感じ、認める思いが生まれたというものが多いが、中に、たくさんの友達の宝物を観た後でより一層自分の宝物への愛着を深めた感想 [図工カードから] があり、まさに‘コレクション’

というものから深める思いであると感じられた。

[図工カードから]

びじゅつかんへいっておもってこぼ
ゆっしょりびじゅつかんのめいーはん
をいおもいました。

私たち大人もそうではないだろうか。たとえば美術館で本物の美術作品を観て、その美しさやよさは味わいつつも、自分の宝物への愛着を上回ることはないだろう。子どもの素直な思いと、宝物に対する見方が表れ出る活動であった。

3. 3 「田中恒子コレクション展」の鑑賞

常設展の鑑賞に続き、「田中恒子コレクション展」を鑑賞した。子どもたちは自由にコレクション展を観て回った。常設展を観た時は「いいな」「おもしろいな」「わからないな」などと思った作品を書きだそうというふうに、いくつかの視点を与えながらも作品を自由に観る活動をしたのだが、今回は一人のコレクターが自宅に所蔵している作品のコレクションということもあり、「もし、おうちに持って帰れるとしたら、どれを持って帰りたいか」と投げかけておき、作品の中でお気に入りの3つを選ぶという視点を持って鑑賞した。子どもたちが「持って帰りたいベスト3」に選んだ作品はばらつきを見せ、1階の常設展を観た際は2つの作品に人気集中していたのに対して全く違った反応となった。子どもたちは瞳を輝かせて様々な作品を観て、夢中になって図工カードに書き込んだり、作品を真似してポーズしたり、作品や題名から想像を働かせたりしていた。

そこで次の学習で、子どもたちが選んだ作品を集計し、多くの子に選ばれていたいくつかの作品の中から二つを取り上げ、全員で鑑賞することにした。詳細については次項で述べていく。

4. 授業の考察

4. 1. 鑑賞を通じた子どもの姿

美術館での本物の美術作品と出会い、子どもたちによる「1Cびじゅつかん」の活動を楽しみ、「田中恒子コレクション展」の個々の鑑賞を経て、子どもたちと「PixCell-Sheep (名和晃平)」と「家系図 (呉 採鉦)」を取り上げ、二つの作品を取り上げ、全体での鑑賞を行った。低学年の子どもたちに対する対話型の鑑賞の試みでもあった。

【PixCell-Sheep (名和晃平) の鑑賞】

まずは、‘おうちに持って帰りたい’と選んだ子の言葉を出発点とした。すると「きらきらしているから」「かわいいから」「さわりたかったから」などと観て受け取る感じと思ひから、自然に「重そうでつくりにく

そう「中に本物の羊がはいっているんだよ」といった、質感や作品の詳細に触れる発言につながり、子どもたちは思わずそれを確かめようと作品に近づいた。表面はびっしりと透明のビーズのようなもので覆われている形のずっと奥に本物の羊がいることをどの子の瞳も探し出そうとしていた。[写真6] その後、「この羊は

[写真6]



どこにいたんだろう？」という問いが生まれ、次々にその予想を口にしていく子どもたち。ここに子どもたちの想像の広がりを感じた。

また、近づいて観たことによって作品の匂い気がついた子もいた。接着に使われたボンドの匂いがかすかにしていたのである。無数のビーズによって形づくられている羊から感じる匂い、そこまで大人は感じられるだろうか。ここに低学年ならではの五感を活かした鑑賞の楽しみ方があると感じられた。

4. 2. 感受と言語のかかわり

題材への願いとして、3つのことを大事にしてきた。

- 本物の美術作品に出会うこと
- 作品から受け取る感じや思い、気づきを言葉にすること
- すきなものをあつめる、ならべる、楽しさを味わうこと

中でも2つ目に挙げた鑑賞学習の中での学び、感性を働かせ、感じることをそのものとそれを外に表す言葉の役割を追求したいと考えてきた。そのために、子どもが気づいたことを観たままにつぶやいたりささやいたりすることをまずは基本とした。その中で互いの気づきから次々と言葉がふくらみ、子ども同士、言葉が連なり合って進んでいく。そんな中で、内容が質的に変化しつつある発言を取り上げて深められるようにしたいと考え、見守っていた。例えば、観る視点が新たに広げられそうな発言、表面から内面に切り替わる発言、自分の生活を照らし合わせた比喩的な発言などである。前項に挙げたPixCell-Sheep(名和晃平)の鑑賞では、自然と子どもの表現が前項のように質的に変化し、作品により近づいて観ようとする身体の動きまで引き出す流れが起こったので、教師は子どもたちの発言のやり取りを見守る立場となった。

美術作品を鑑賞するということは、作品に込められた作者の思いを知ることや作品の背景などを知ること

が重視されがちである。確かにそういった知識理解的な部分も大切だということはわかっている。しかしそれよりも、観ている子ども自身の感性を大切に、「観る」ことから「感じ」、そこから生まれる思いを「言葉」にするという連なりを重視し、さらに友達の気づきや思いを表現する「言葉」を通して交流しながら、また「観て」…「感じて」…という連鎖が起こることを期待して取り組んだ。子どもたちとの鑑賞していく中で、そんな連鎖が起こっているのを手ごたえとして感じた。

4. 3. 本物に触れる学び

「本物に出会うこと」、これ以上に説得力のあるものはない。実際に美術館を訪れ、本物の美術作品に触れることで、目には見えないが感性を揺さぶるものが多くあったことは、子どもたちが「先生、また美術館行きたい」「次はいつ行くの?」という言葉が口々に言っていたことから確かである。子どもたちは1年生ながらも美術館の独特な雰囲気や、美術作品の力を感じ、それらの魅力を十分理解できたのだろう。やはり小さい年齢から本物の美術作品を鑑賞する学びを取り入れるべきである。学習指導要領には低学年の内容として記載されていないが、本校のような立地条件に恵まれている場合はそのよさを学校の特色として活かしたいと考える。

【アートコレクター田中恒子さんとの出会い】

今回鑑賞した「田中恒子コレクション展」は、現代アートコレクターの田中恒子さんが自宅で所蔵しておられた20年にわたって集められた、100人以上による1000点以上の作品の展覧会である。田中さんは住居学を専門とする研究者で、長く大阪教育大学で教鞭をとってこられ、今、「現代美術と一緒に暮らす」という提案をされている。多くの現代美術作品を集めることは、ご本人、個人の楽しみであるとともに、今まさに生み出されつつある現代の文化財を後世に伝える行為としてコレクションをされている。そして、現代美術が日常から遠い存在ではなく、子どもたちにとっても身近な存在として感じてほしいと、学習の計画にも深い理解を示して頂き、授業にも参加して下さることを快く受けてくださった。

次に挙げるのは、授業の中での田中さんとの出会いの場面である。

二つの作品を鑑賞した学習の最後に、「ここにあるぜんぶの作品をあつめたのは一人の人なんだよ」と告げると、子どもたちは「え〜っ!」と驚いた。そして続けて「その人にきていただいています」と伝えると、子どもたちは歓声をあげてまわりをキョロキョロ探し、ようやく一人の方が前に歩み出ると、羨望のまなざしに変わった。美術館のフロアいっぱいにある作品のすべてを持っているのが一人の人であったという驚きと、

その人が目の前に表れた二重の驚きに子どもたちはまた目を輝かせた。そして、田中さんが話して下さる言葉をじっくりと聞いていた。[写真7]

[写真7]



作品の詳しいお話や作者のエピソードなど、伝えることは教師にもできる。しかし、コレクター本人から聞かせてもらうことの力はとても大きい。子どもたちはこれまで観てきた「作品」が、「目の前にいる人のもの」という新たな見方を持って向き合っていた。そして、「どうしてこの作品をほしいと思ったのか」「おうちのどこにおいていたのか」など積極的に質問したり、その答えをじっと聞き入ったりして作品にまなざしを向けていた。

ここに、本物に触れる学びがあった。美術作品同様、コレクターご本人と出会うことで、よりそれらの作品が身近なものとなり、美術作品との心の距離を縮められたのではないかと感じている。

5. 成果と課題

本研究を通して強く感じたことは、本物の美術作品に早い時期から触れることの重要性である。低学年における鑑賞の学習の対象となるのは、一般的には自分や友だちのつくったものであり、美術作品に触れることまでは記述されていないが、美術作品を理解するのに年齢制限はない。むしろ、やわらかい感性と五感で感じる豊かさあふれる低学年の時期から、本物の美術作品に触れる経験を多く持つことは、その後の図画工作科教育や美術科教育だけでなく、多くの学びに影響を与えるものになると考える。そして、えがいたりつくったりする表現の学習と同様、鑑賞の学習も重視すべきであり、かつ、感性を働かせたり連動して言語感覚を育てたりするねらいとして大きな意味を持つ。

また、低学年での鑑賞学習のあり方も探ってきた。低学年において、美術館で学習する際にはまず、美術館でのルールやマナーについての理解が必要不可欠であり、この基本的な学習が大変重要である。そして、この時期の子どもたち特有の感覚や感性を揺さぶるものを出合いの対象にしたいと思う。今回のように、子どもたちの年齢により近い作品であるといえる現代美術の作品などはそういった点から見てもよい学習対象であった。他にも、地元和歌山に根差したアートや作家、色や形、材料の感じが楽しめる作品、自然のものから作りあげられた

芸術なども次に対象として研究してみたいものである。さらに低学年における鑑賞で今後取り入れたいのは、アートゲームのような手法でより美術作品を身近に感じ親しめるようにしたり、「きく」「さわる」「かぶ」といった、「みる」こと以外の要素を含んだ作品を対象としたりすることで、より一層子ども一人ひとりが感覚的にとらえられる鑑賞も取り入れたいと考えている。

そして、本研究で得られた手ごたえから、学校独自の美術館における鑑賞のカリキュラムをつくっていくということも視野に入れたい。常設展のように、美術館自身が所蔵している作品は6学年を通して鑑賞できるというよさがある。毎年鑑賞することから、何度観ても変わらない思いを持ったり、自分なりの作品解釈が作りあげられたり、観るたびに出会う新鮮な気づきや思いも感じられたりするだろう。美術作品と触れるとき、その時々的心情によって、また、発達段階によって、様々なことを学ぶことができる。そこには、小学校生活を通して美術作品と触れあいながら成長していく素晴らしさがある。

鑑賞教育は、図画工作科の内容にありながら、教科をこえるほどの多くの学びを含み、大きな学びのひろがりをもつ。今後も鑑賞学習の研究を続けていきたい。

参考文献

- ・上野行一『まなざしの共有』（淡交社・2001）
- ・アメリカ・アレナス『みる かんがえる はなす』（淡交社・2001）
- ・福のり子『アート・リテラシー入門』（フィルムアート社、2004年）
- ・平田オリザ『対話のレッスン』小学館、2001年
- ・石川誠「学校と美術館の連携に関する考察Ⅰ：美術館教育普及担当者への調査から」『美術教育学』（美術科教育学会22号、2001年）